〈ケア〉を考える会-岡山（第 43 回）

（「夜廻り猫」）

■日時：2019 年 3 月 3 日（日）16:00～

■会場：倉敷市真備町箭田 5188　（林道也　宅）
駐車場：「メインセンター遠田」　⇒　林宅から北東へ約 100m、
遠田池の堤防下（遠田池の北側）、小さな灯篭・祠とムクノキの大木が目印

■内容

（１）読書対話　16：00～

鷲田 清一 著『老いの空白』（岩波現代文庫）第3章

『〈老い〉の時間 ― 見えない"成熟"のかたち』

▼〈老い〉がまるで無用な「お荷物」であって、その最終場面ではまず「介護」の対象として意識されるという、そんな惨めな存在であるかのようにイメージされるようになったのには、それなりの歴史的経緯がある。生産と成長を基軸とする産業社会にあっては、停滞や衰退はなんとしても回避されねばならないものである。そしてその反対軸にあるものとして、〈老い」がイメージとして位置づけられる。生産性や成長性、効率性、速度に、非生産的＝無用なもの、衰退＝老化として対置されるかたちで。〈若さ〉と〈老い〉という二つの観念は、産業社会ではたがいに鏡合わせの関係にある。（P.５４）

▼重要なことは、〈老い〉が負の側を象徴するのは、時間の中で蓄えられてきた〈経験〉というものにわずかな意味しか認められないということである。〈経験〉ということで、身をもって知っていること、憶えてきたことをここでは言っているのだが、産業社会では基本的に、ひとが長年かけて培ってきたメチエともいうべき経験値よりも、だれもが訓練でその方法さえ学習すれば使用できるテクノロジー（技術知）が重視される。機械化、自動化、分業化による能率性の向上が第一にめざされるからである。（中略）〈老い〉が尊敬された時代というのは、この〈経験〉が尊重された時代のことである。（中略）〈経験〉がその価値を失うということ、それは〈成熟〉が意味を失うということだ。さらに〈成熟〉が意味を失うということは、「大人」になるということの意味が見えなくなることだ。（P.55）

（２）懇親会　18：00～

食べながら飲みながら語り合います。
食べ物、飲み物は持ち寄りです。
会費：無料（懇親会で持ち寄りできない方は 1000 円程度のカンパをお願いします）

★どなたでも参加できます（初参加歓迎）。本を読んでいなくても（お持ちでなくても）参加可能。
★申し込み・問い合わせ⇒ 林まで：michi-care@outlook.jp　090-5366-1497

・・・申し込みが必要です。氏名、電話番号、メールアドレス明記の上、林までメール送信願います。（定員となり参加できない場合にのみ、返信いたします）

「〈ケア〉を考える会-岡山」ﾎｰﾑﾍﾟｰｼﾞ
http://okayama-care.jimdo.com/